

社会民主党機関紙

NO.100
熊本県版

社会新報

THE SHAKAI SHIMPO

2026年秋号

(曜日) 号外

発行所

社会民主党全国連合機関紙宣伝局

通刊(木曜日発行)

〒104-0043 東京都中央区湊3-18-17マルキ熊本ビル5F

電話代表 03(3553)3787・振替 00140-1-3203

●定価185円 ●1ヵ月720円 ●送料168円



「希望は社会民主主義」

いのちとくらしを守り、

誰もが自分らしく生きられる熊本へ

—社会新報2026年8月20日号掲載熊本関連記事を紹介し—

熊本県連合の行動と呼びかけ

党員の皆様、そして日頃より社民党の活動にご理解とご支援を寄せられている熊本の皆様に心より感謝申し上げます。

主義の視点での政策をひろげるためにも、

『社会新報』普及・購読運動へのご参加を強く呼びかけます。

社会民主党熊本県連合

代表 今泉 克己

『社会新報』2026年8月20日号(通巻5888号)におきまして、橋村りか副党首の社会民主主義に対しての思いが大きく取り扱われています。社民党の目指す理念と行動を深く示す記事となっています。熊本県連合では、この内容を広く県民の皆様にお伝えすべく、本紙面を作成いたしました。

本号では「希望は社会民主主義」をテーマに、橋村りか副党首およびラサール石井幹事の寄稿が掲載されました。

「一人の人間として大切にされる社会」「誰もが自分らしく生きられる社会」の実現に向け、今こそ格差と貧困を是正し、公助と助け合いの政治を取り戻さなければなりません。

熊本県連合は、これらの提言を果敢に行動へと移してまいります。党員・支持者の皆様におかれましても、草の根からの社会民主



社会民主党党首 福島みずほ

誰だって病気になる、年をとり、障がいを持つかもしれない。家族や友人も年をとり、障がいを持つかもしれない。仕事を失うかもしれない。「自己責任」の社会は、ほとんどの人にとって生きづらい社会である。格差と貧困が拡大し、今日も未来も見えない社会だからである。

社民党は、一握りの富裕層のための政策である新自由主義を批判し、社会民主主義の政策を実現しようと奮闘してきた。「答えは現場にある」「弱音をはける社会へ」。

清末愛砂さんに憲法カフェの講師養成講座をやっていた。そのなかで清末さんは、平和を阻害するものとして、専制と隷従、圧迫と偏狭、恐怖と欠乏を挙げた。社民党はどんな社会をつくりたいか。それこそ憲法前文が言うように、全世界の国民が恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有する社会である。恐怖がないということは自由であるということ、欠乏から免れるということは生活苦がないということである。まさに社会民主主義。社会民主主義でなければ平和はつけないし、全ての人の人権保障もない。平和を阻害するものを解決していかなければならない。

ニューヨークのママダニ市長は選挙において、家賃の高騰を抑え、教育費を無償化することを打ち出した。私たち社民党は、社会保障の充実、労働法制度の規制、公共財の保障、住まいの保障、教育費の無償化と奨学金金利の減免措置などをやっていく。あなたの生活を守るために政策を実現する。

政府は弾薬庫工場の公設民営の検討を打ち出している。公共でやるべきことは、こんなことではない。医療や介護や教育、公共交通、第一次産業、水、森、緑などを社会的共通資本として充実させていくことだ。税制も公平な税制に変えなければならぬ。

25条の生存権を憲法に入れさせたのは社会党の国会議員である森戸辰男さんと鈴木義男さんである。人間らしく生きることが、自己責任ではなく権利である。憲法が活(い)かされる社会へ。社会民主主義は希望である。社民党がその希望になるように頑張りたい。

8・20
[本増刊]

社会
新報

希望は
社会民主主義

生きづらさをなくす
不断の改革運動を

私たちのめざすものは
平和・自由・平等・共生

無地域救済の資金

生きづらさをなくす
不断の改革運動を

私たちのめざすものは
平和・自由・平等・共生



福島党首と女性常任幹事の座談会に参加し抱負を述べる橋村りか副党首。(5月13日)



総がかり行動の国会正門前大行動でスピーチする福島党首。(7月19日)



衆議院の比例定数削減に反対する7.9院内集会でスピーチするラサル石井幹事長。

橋村副党首とラサール幹事長が寄稿

「希望は社会民主主義」を共通テーマに、社民党の橋村りか副党首とラサール石井幹事長が本紙に寄稿した。それぞれが思い描く社会主義像とは同一ではないが、共通点は、皆が幸福になり、皆が生きやすい社会を実現することだ。

障害のあるなしにかかわらず

私は、わが娘と共に生きる中で、障害のあるなしにかかわらず、子どもが地域の学校に仲間と共に通えるようになるための活動を続けていました。

「あなたは、ここにいたいですか？それとも、もっとあなたに『ふさわしい』場所にいきますか？」そう、問われ続ける、この世に生まれて6年しか経っていない子どもたち。

「わたしは、ここにいたいじゃないの？」「わたしは、この学校で、じゃまなの？」。この、子どもたちの声なき声を、この社会に届きたい。ただその想いで続けていた活動が、まさに「社会民主主義」なのだと思いついたのは、わずか3年前でした。

社民党宣言には、こうあります。

「私たちは、社会民主主義を掲げる政党として、人々が個人として尊重され、自然と調和し、平和で

人間らしく生きることのできる社会を実現します」

生きていくのに、条件をつけられたり、制限をかけられたり、「〇〇ができたら、ここにいていいよ」と言われるのは、人を人として見ていない。社会を回す歯車の一つとして、経済を成り立たせる小さな「ねじ」の一つとしてしか、人間を見ていないということ

です。私たちは「この社会で生きていくからには、何かの役に立ちなさいよ」と言われ続けているのです。

私は、ここで生きていいいの？そう問わなければならぬ社会ほど、悲しいものはありません。

私たちは、誰もが、ひとりの人としての尊厳を守らるべきです。

生きているだけで社会の一員

生まれた場所、生まれた国、民族、性別、宗教、障がいや病気のあるなし。それらは、その人のかたちづくる一部ではあっても、その人そのものではない。「〇

〇人の「男性（女性）の」「〇〇という障がいのある」と、なぜ、枕詞をつけられなければならないのでしょうか。強くなっていい。何かができなければ社会の一員として見てももらえないなんて、ない。

「この社会は、生きるに値する」と、この国に生きる全ての人が感じられる。いつの時代でも、どこに生まれても、あなたがあなたらしく、私が私らしく生きていける。これが私の希望。「社会民主主義」です。

橋村副党首とラサール幹事長が寄稿

希望は

社会民主主義

一人ひとりを社会全体で支え合う政治へ

ラサール石井

橋村りか

希望は社会民主主義

あなたがあなたのままでいられる社会を

橋村副党首の理念を

県連合みんなで共有し、

今こそ格差と貧困を是正し、

公助と助け合いの政治を取り戻

さなければなりません。



社民党熊本県連合代表
今泉克己

4月29日の党大会終了後、党新執行部記者会見に臨む橋村りか

